

研究課題：高齢者の well-being な（健康で生き生きした）生活を目指した口からの健康支援システム構築のための実態調査

研究者名：中村譲治<sup>1)</sup>，松岡奈保子<sup>1)</sup>，川上誠<sup>1)</sup>，藤田孝一<sup>1)</sup>，沼口千佳<sup>1)</sup>，山本和宏<sup>1)</sup>，岩井梢<sup>1)</sup>，筒井昭仁<sup>1)</sup>，<sup>2)</sup>

所 属：<sup>1)</sup> NPO 法人ウェルビーイング，<sup>2)</sup> 福岡歯科大学口腔保健学講座

**【目的】** 高齢者では、残存歯数、20 本以上の残存歯を持つ者の割合共に増加してきているが、そのことが高齢者の well-being な生活に結びついているかどうか検証は行われていない。今回予備調査の結果をふまえ、対象者を拡げ、広域で調査を行い、高齢者の口腔の健康および well-being と定期来院を含む歯科受診との関係を明らかにすることを目的に調査を実施した。

#### **【対象・方法】**

**調査1**：2008年3月に福岡県内の19 歯科医院の来院者 248 名に自記式質問紙調査を実施した。さらに調査を実施した中で、歯科医院に健康診断のために定期的に来院している者 106 名に歯科医師または歯科衛生士が「何故定期的に来院していただけているのか？」を聞き取り、インタビューシートに記入した。

**調査2**：2008年3月、山口県、福岡県内に在住の40 歳以上の男女 241 名を対象に調査1で実施したのと同じ自記式質問紙による調査を実施した。

**【結果】** 口腔内の困りごとに関しては「歯グキの病気がありそうである」(31.4%)や「食べ物がひっかかる」(25.6%)が多かった。年齢とともに増加する傾向にあり、高齢者において歯周病の予防管理は重要であると考えられた。

20 本以上の歯を有する人の割合は、年齢とともに減少していた。最近1ヶ月の主観的な健康状態については「健康でない」、「あまり健康でない」と答えた者の割合は50 歳代、60 歳代と較べて70 歳代、80 歳代で増加していた。しかし、ウェルビーイング度は70 歳代までは20 本以上の歯を有する人の割合の減少に関わりなく、良好になる傾向が認められた。

定期健診の効果を検討するために、定期来院者と治療来院者を比較したところ、定期来院者に、現在歯数が多く、より硬いものが咀嚼でき、食生活も良好であることがわかった。さらに、趣味を持ち、高頻度に外出していた。調査2においても、定期健診受診群が良好な食生活を送っていた。インタビューの結果より、定期健診受診者は口腔診査の実施、ブラッシングのチェック、プロケアに対して満足しており、これまでの病気の経験、治療の体験から早期発見とそれに対応したケアに意義を実感していることが示唆された。

調査2の結果より、かかりつけの歯科医院がある者は74.3%と4人に3人はいるという結果であったが、定期健診に行っていない者が70%と同じくらいの割合であった。

**【結語】** 高齢者の well-being な生活を目指すためには、歯周病の予防管理に力を入れ、口腔内だけでなく全身の健康にも目を向けたサポートが必要であることが示唆された。定期健診の効果は口腔内を良好に保ち豊かな食生活につながるだけでなく、well-being や生活充実へのつながる可能性を秘めているため、地域の高齢者が定期健診に通えるシステムを作る必要があると考えられた。